院外茶話

vol.62　平成 22 年 7 月 1 日

卵が正しい文字だけど
食べるときには動物の
匂いがしていけない
玉子の方が美味しそう

玉子の値上げ ーいいと思うー

親戚じゅうが集まっていたから、思えば法事だった。初めて見る大きな寿司桶に、にぎり寿司がきれいに並んでいた。

全員が一時に囲める席がないので、小さい子から順番に、好きなお寿司を食べていいと言われた。こうして最年少の私がまず、一番に手をつける権利を得た。

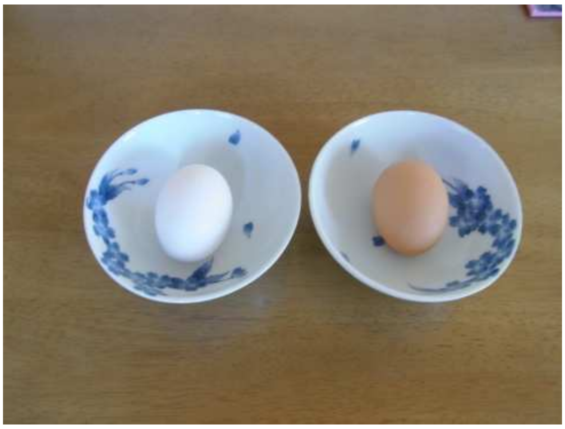
しかし、残念ながら寿司というものを、ほとんど見たことがなかった。手をのばしたのは知っているものだけで、玉子とかんぴょう、カッパ巻きくらいだったかな。あとは大人たちが、マグロやヒラメを食べたのである。多分。

その玉子は、今と比べればかなりの高級品で、専門の玉子屋さんがあった。当時は渋谷に住んでいたので、恵比寿市場の玉子屋さんに行くと、もみ殻のつまった木箱がいくつかならんで、その上に裸電球がぶら下がっていた。

玉子はバラ売りで、もみ殻の中から一つずつ取り出し、なぜか裸電球にあてて中を透かして見て、それから包んでいた。何を確認していたのだろう。中でヒヨコになっていないか、確かめた訳でもあるまいし。

玉子の値段は 1 個 10 円くらいだったように思うが、今の価値に直せば 100 円から 150 円。玉子のにぎり寿司から食べたのも、あながちはずれではなかった。

その後、鶏の飼育方法が格段に進歩をして、玉子は大量生産の時代に入る今、日本人は 1 日 1 個の玉子を消費するので、生産量は毎日 1 億 3000 万個くらいかな？しかし、薄利多売を突き詰めれば、過当競争がおきるのは当然で、生産者もこんな形を望んだわけではあるまい。



左が白玉、右が赤玉です。見ただけではどちらが高価なものかわからない。

さらに鳥インフルエンザでも発生して、何万羽という鶏が殺されると、被害は特定の場所に集中する。予測のつかないリスクを考えると、鶏一筋、薄利多売の一辺倒では具合が悪い。何か工夫はないのか。

そんなことを思いながら、スーパーを覗いて見たところ玉子の値段は安いもので、1 パックが 200 円を切る。つまり 1 個が約 20 円。しかし、ヨードとか光とか、いろいろな名前がつくと少しずつ値段があがる。最も高かったのが、茨城産野地卵で 1 個当たり 73.5 円。何と 4 倍近い開きができる。この差はいったいどこからくるのか。

高級なステーキハウスに行くと、焼く前の肉を誇らしげに見せてくれるが、いくら上等でも玉子を見せるレストランはない。

上等な玉子は餌が違うとか、放し飼いとか、寝る前にビールを飲ませるとか、何か理由があるのだろう。見た目で区別がつかないのだから、高級品なら、その理由をきちんと解説をしておけば、買う方も納得がいくのに。

私だったら生まれて来るまでの、玉子の生い立ちを消費者に伝えようと思う。鶏小屋の BGM にベートーベンでもながして、気品のある玉子を作る。ブランド名は「田園」とか「月光」。高価な玉子との劇的な出会いを強調するならば、「運命」と言うのもいいかも知れない。

ともかく、試しに一番安い玉子と、高い玉子を買ってきた。もちろん、見た目はどちらが高級品かわからない。割ってみてもわからない。さらに食べてわからなければ、意味がない。

では、食べ比べるにはどういう調理方法がよいか。それはもちろん玉子かけご飯である。

家族で玉子かけご飯の試食を行ったところ、全員一致の結論が出た。73.5 円の玉子は濃厚な味がした。匂いの強い、昔のほうれん草や人参と一緒に食べた、あの玉子かけご飯で、こっちの方が断然美味しかった。

肉、果物、おしなべて食材は美味しくなったのに、なぜ玉子だけがまずくなったのか。大量生産のために、何かの歪みが生じたのか。

世の中、値段が高いものがよいとは限らない。でも玉子の場合、鶏にもう少し手間隙かければ、美味しいものができるのではないか。あるいは自然に近い環境で育てるとか。

4 倍近い経費がかかるかもしれないけれど、あとは消費者がその味をどう感じて、そこにどれだけの金を支払うか。

でも、73.5 円でこんなに感動できるならば、私はときどき高い玉子を買ってみようと思う。

空の上の入院日記(4)

三が日を自宅で過ごし、四日に病院に戻りました。しかし、やるべき検査はほぼ終わっていたので、寝ているだけの日が多い。ついに 1 月 9 日、念願の退院となりました。

待ちわびた自宅の暮らしではあったけど、まだまだ大量のステロイドを内服中。体調は最悪です。そして、何のはずみか数日後には起き上がれなくなって、病院を訪れたところ再び入院です。

病室で毛布にくるまっていると、ナースステーションの方から私の処置をどうするか、もめている様子が断片的に伝わってきます。まず、減らせる薬は極力減らす。問題はステロイドの量で、私の同級生は減量を指示します。しかし、実務を担当していた若い Y 医師は、まだ減らしたくない。

まあ、どちらの意見が通ったところで、錠剤が 16 錠になるか、15 錠になるか、その程度の問題なのですが、私自身はステロイドに強い恐怖感を感じるようになって、実際減らしてほしかった。

そしてようやく結論がでたようで、Y 医師の意見は通らなかった。数名の医師や看護師が連れ立って病室を訪れ、薬を減らす方針など、知らせてくれました。この時、Y 医師はいつになく私に毛布をかけてくれながら、他の人には聞こえないよう、耳元でこうつぶやきました。

「今から今後、問題となる治療を始めます」

自分の意見が通らなかったときのくやしさも、わからぬではない。特に若い時は。しかし、それは院内で解決すべき問題であって、本来外部の人間である患者で、はらいせをしてはいけない。

この言葉は聞かなかったことにして過ごし、実際何事も起きなかったけれど、何かの非常事態が生じたときに、この医師がどういう行動をとるかと思うと、信頼感はなくなった。

恐ろしいことは一人の医師の評価が医局の評価を変え、医局の評価が病院全体の評価を変える。そういえば、交際相手の看護師を妊娠させた上、その子に子宮収縮剤を投与して、逮捕された医師の事件が報道されていたけれど、あの医師も同じ医局だった。

母校で起きた事件でもあるし、たまたま不届きな医師が紛れ込んだだけであることを願う。医師と患者が、相互に不信感をもってしまったら、医師は保身に走って、診療は萎縮をする。患者は常に不安のうちに、医療を受けなければならない。

せっかく医療の意識改革も始まったところなのだから、前に行かなくては。

東京タワーより大きな森ビルがあって、その下では外国人がよく写真撮影をしています